
高校生の時間外廊道（じかんがいろうどう）

よみよみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校生の時間外廊道^{じかんがいうどう}

【Nコード】

N4985Z

【作者名】

よみよみ

【あらすじ】

普通の高校生、愛田千秋に届いた一通のメール。それが全ての始まりだった。メールは、名無しで内容は、『踏ませるな、助ける』全く訳が分からない、メールだったが。千秋は、そのメールの重要度を次の日？ になってから気づくのであった。ループ！？ タイムトラベル！？ 超能力！？ とにかく常識は、4月6日に覆された！！

第1話 一通のメール（前書き）

この作品はフィクションです。実際の人物・団体・事件などには一切関係ありません。

第1話 一通のメール

4月6日のこと……

俺の睡眠を邪魔したのは、いつもの目覚まし時計のうるさいアラームでは無く、一つメールの着信だった。

ブーン、ブーン、ブーンブーン！

俺の枕元で、これでもかと自己主張をする、人類の英知の結晶。
「あーうるさいな」誰だよ」こんな朝っぱらから、メールなどしてくる奴は」

そのバイブ音によって半覚醒状態の俺は、重い瞼を少し開ける。
部屋のカーテンの隙間からは、暖かそうな日の光が指しこんでいる。
残念ながら、もう朝みたいだ。

携帯を開けて液晶画面に目をやると、6時58分をデジタルがと
ても分かりやすく教えてくれた。いつも起きるのは7時ジャスト。
どうやら、もう2度寝をしている暇は、無いみたいだ。俺は一つの
ため息を漏らす。

携帯の画面には、新着メール1件。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日目ミツシヨン。『踏ませるな、助ける』

はつきり言おう。訳が分からない。俺の睡眠時間2分を返せ――
ジリジリジリジリ！

「うるせー！」

バン！

「あー今日は、ついて無い1日になりそうだ」

眠たい眼を右手の指で擦りながら、ため息混じりに呟いた。

朝の登校。俺は、通い慣れない道を自転車で走っている。確かにまだまだ新鮮さがある道だ。昨日が入学式だったのだから、当然の事だろう。中学の時の通学に比べて、風を切る感覚が気持ちが良いと思うのは、新生活のスタートと言う出来事が加担しているのかもしれない。

だが、俺は余り新生活に期待はしないように心がけている。本来なら、もっと新生活らしく、ウキウキとしていたほうが良いのかもしれないが、変に期待すると、あとでの理想のギャップに耐えられない可能性もある。実際、中学の時もそんな事があったし、妙な期待は、しない方がいいだろう。俺は、同じ轍を二度も踏みたくはない。とはいえ、俺だって、全く期待していないのは、嘘になる。そりゃ高校生だし、彼女の1人でも作りたいなんて思っているのは此処だけ話だ。つまり俺は、何処にでもいる普通の高校生で在り、高校生らしい普通の日常をエンジョイする、そんなつもりだが、少し気になるのが朝のメールだ。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日目ミッション。『踏ませるな、助ける』

何だ、この訳のわからない、文章は？ 新手のチェインメールだろうか？ それとも俺の悪友か誰かの悪戯だろうか？ 俺は頭の中で自分の身の回りに居る容疑者の顔を思い浮かべた。だとすると、一番怪しいのは――

俺がこれから順調に行けば3年間はお世話になるであろう学び舎に着き、自転車小屋へ我が愛車、まだ新車の19800円。命名『壱キュッパ』を駐車していると、校門の方から馬鹿のように、いや間違った、馬鹿な容疑者第1号が大手を振ってこちらへ向かって自転車を漕いで来る。

「よっおおー！ 愛ちゃん」

殴りたくなる笑顔で自転車を漕いでこちらへ向かって来る悪友に、
どうやら俺もそれなりの誠意を見せなきゃいけないか。

タタタッタ！ タタタッタ！

俺は、馬鹿に向かつて、走って行き、右腕で朝の挨拶のラリアットを食らわしてやった。

「グットモーニング！」

「ごふ！」

自転車から倒れ込み、その場に転倒する馬鹿。

「痛ててて」

俺は、ソイツを見降ろしながら、

「おい、そのあだ名で呼ぶなど、何度言ったら分かる？ 佐伯 利
かず 一俺の名前は、愛田 あいだ 千秋だと、あと何回言えば、その頭で理解出来る？ 中学三年間でお前は、何を学んできた？」

親指を立て利一は、

「お前の好きなものからスリーサイズまで覚えて来たぜ」

「……楽に逝けると思うなよ」

俺がコイツにいつものノリで殴ろうとした時、俺達の目の前に、制服を着て分厚い黒い本を持っていて、微笑んでいる、長髪の子生徒が――

かつ、可愛い――

「通行の邪魔よ、消え失せなさい、ゴミクス共」

「……………」

時が止まった気がした。

俺達に女子とは思えない言葉を吐き捨てると昇降口へと消えて行った。

第2話 1 - 3

「通行の邪魔よ、消え失せなさい、ゴミクズ共」

「……………」

時が止まったきがした。あんな言葉を女子に吐かれたのは、生まれて初めての体験だったと思う。

そう俺達に言い放つと、その女子は、昇降口へと消えて行った。

「……おい、千秋」

その女子が立ち去った後、利一は俺に驚いた顔をして俺に言った。

「何だ、馬鹿」

「高校つて怖えーな」

確かに、怖かったが、そんな事よりも、俺は、

「そうだな、だか俺は、お前のほうが、ある意味怖いよ」

「それって、どう意味だ？」

コイツと話しているのは、疲れるから、俺は利一を置いて、早足で昇降口へと向かう。

「おい、待ってよ」

急いで、自転車を置いて、俺の後を付けて来る、利一。

「それにしても、奇跡だな、また千秋と、一緒の学校になれるなんて、やっぱ、神様は、居るな」

何をしらじらしい。お前が俺の受ける高校を調べて、同じところを受けたんだろが！ 滑り止めまで、同じところ受けやがって。こんな奴が、俺よりも、数倍頭が良いと思うと、人間は、つくづく平等でないと感じてしまう。

「おい、利一」

「ん？」

「明日、学校来ても、お前の上履き無いからな」

俺は、コイツは、虐め宣言をした筈だが、

「何だよ、俺の上履きが欲しいなら、今やるよ」

下駄箱から、上履きを取り、俺に渡す、利一。コイツは、どんだけポジティブなんだ？ このポジティブを日本全国民が持っていれば、自殺なんてモノは、この国に無くなるかもしれないな。

「おお、そうか——」

俺は、まだ白く汚れない、上履きを受け取り、

「利一、今何時だ？」

利一は、何も見ず、素早く、

「今、8時26分36秒を回ったところだけど」

時刻を答える。何も見ずに。

「あと、3分弱かホールームが始まるのは——」

「おらああー！」

ブン！

昇降口の外へと、上履きを投げ捨てた。上履きは、華麗な弧を描き、学校の柵を越えて行った。

そのあと俺は、自分の教室を目指し、前を向き歩きながら、我が悪友に背中を見せ右手を頭上へと持つて行き。手を振る。

「じゃあな、高校始まって、そうそう、遅刻するなよ親友」

何か後ろで、ぎゃーぎゃー言っていたが、俺はそれをスルーし。

何事もなかったように、スタスタと歩く。背後から駆けだす、足音が聞こえて、小さくなっていったのは、利一のものだろう。

そして、俺が自分の教室。1-3に入ると、いかにも、始まった感じのういっしき溢れる光景が広がっている。話しをしている者、席に座って静かにしている者、音楽を聞いている者、本を読んでい

る者、様々だ。まだ、慣れていというか、居心地の変な空間。中1の時や、クラス別けをした時を思い出すな。

げっ！

俺が、なんとなく、クラスを見渡していると、さっき、俺と利一に毒舌を吐いた、女子生徒が、静かに、本を読んでいる。

普通にしていれば、可愛いんだがな……アイツには、関わらないようにしよう。

それから、1分程経つと、教室に担任の男生教諭が入って来て、軽く挨拶をし、

「それじゃあ、まず、出席を取ります、まず、安久津——」

その時、点呼の声をかき消すかのように、教室の前のドアが開いた。

ガラー！！

「はあ、はあ、はあ、はあッ、いきなり、遅刻してスイマセン！！」
ドアを開けるな、いなや、大きくお辞儀をする息を切らした男子生徒が。見覚えのある頭、聞き覚えのある声。

何故お前がここに来る利一？ お前の教室は、隣の4組だろうが！
頭を上げた、馬鹿と、俺は目が在ってしまった。

「アリヤ？　なんで、千秋が此処に？」

他人のフリ、他人のフリ、他人のフリ。

「君、何処のクラスだい？　ここのクラスは、全員そろっているんだが？」

担任が、馬鹿に問う。確かに、座席には、もう空席は無い。つまりこの空間にお前の居場所が無い。速やかに在るべきところへ帰れ。
「え？　此処は、4組じゃ……」

一歩さがり、ドアの上にあるクラスプレートを見る利一。

「あつ、失礼しましたー！！」

そう言つて、ドアを閉めて、左の4組の方向へ消えていく利一のシルエットが、教室のドアの上にある長方形の曇りガラスに写った。

そして1ー3我がクラス内は、笑いに包まれた。
はあくアイツと、友達だと、知られたくない。無理だと思っが。

第3話 絶滅危惧種

そして、学校が普通に始まって1日目という事もあり、これと言って授業らしい授業もせず。あつという間に、4時間が過ぎて、昼食の時間がやって来た。

今日は、母親に作って貰った弁当だ、学校の売店というのを試してみたかったが、こういうモノか分からないので、今日のところは無難に弁当を持ってきた。

教室を見渡すと、早くも数人のグループを作って、机をくっ付け、食べようとしている者達も居るが、大多数の人は、自分の座席で、一人飯。1日目じゃあ、まあ、こんなものだろう。

俺が弁当を鞆から取り出した時、教室のドアが開き、朝のリブレイのように、また、利一がやって来た。

「ちあきー！一緒に弁当食おうぜー！！」

少しざわついていた、教室が一瞬で静まりかえった。まだまだ他人行儀が横行している教室でコイツの行動、言動は場違いだからだ。

.....

嫌な間だ、仕方ない。俺は右の手のひらを額にやり、はあ〜と大きなため息をつく。と弁当を持って席を立ち、利一の居るドアへ歩いて行き、静かにドアを閉め廊下に出た。

「千秋、一緒に飯食お——」

俺は、笑顔の利一の頭を掴んで、教室の壁へと、側頭部を叩きつけた。

ドガ！

「あああ、脳細胞が死んだあー」

あすかわらずリアクションの大きい奴だ。

「良かったじゃないか、俺は、お前を殺すつもりだったのに、脳細胞だけで済んで、一生分の奇跡を使い果たしたな、利一」

「仏壇には、千秋と、ツーショットの遺影を――」
ドガ！！

「何か言ったか？」

利一は、流石に2発目のウォールアタックが堪えたのか、かすめるような声で、

「いいえ、すいません」

「で、飯は、何処で食うんだ？」

「千秋、俺と一緒に飯を食ってくれるのか？」

「勘違い、するなよ、この状況で、教室に戻りたくないだけだ」
変な空気になってしまった、教室にわざわざ戻りたくは無い。もうコイツと俺の交友関係はきつとクラスの連中に残念ながら知られてしまっている事だろう。

俺がそんな事を嘆いていると。

「この、ツンデレめー」

と、言いながら、俺の頬に人差し指を当てやがった。

怒。怒。怒。負の感情がヒートアップ。

ドガ！ バキ！ ドン！ バシ！ グギ！

「ぐぎやああああ」

残酷過ぎて、描写出来ません。擬音語と、利一の悲鳴だけで、イメージして下さい。

「行くぞ」

鼻から、赤い体液を流しながら、利一は、

「はい」

と、弱々しい声を出した。まあ、問題無い。そして俺と利一は、取りあえず廊下を歩く。

「ち、ちいあき」

わざとだろうが、女々しい声で俺の名を呼び、

「最近俺に対してのツッコミが激しすぎやないか？」

「何言っているんだ、利一はドMだから喜んでるんだろ？」

俺は、邪気の無い口調で利一に言った。

「いや、俺はドMじゃないからな、それともう少し柔らかく、ツッコンでもいいだろう？」

「そんな風になったら、俺のお前の関係は、崩壊するがそれで良いなら良いけど。大体お前は、どうしてそんなに俺に構うんだ？ 構うにしても他の構い方が在るだろう？」

コイツの俺に対する言動はとにかく気持ち悪い。

「だってさ——千秋優しいじゃん」

「はあ！？」

不意な言葉に少し動揺してしまった。

「俺のどつ、何処か優しいだよ」

「俺なんかに構ってくれるしさ——不意な言葉にそんな驚くし。素直じゃん」

コイツは頭が良いんだか、悪いんだかたまに分からなくなる。頭脳は良いんだが。

「もしかして、照れた？」

「照れて無い」

ちよつと声に感情をこめて言ったが、

「顔が赤くなってるぞ」

「照れて無い、言ってるだろ！」

そんな事を言っているが、若干頬が熱い気もする。もしかしたら

顔が赤くなっているかもしれない。こんな事を面と向かって言われるのは苦手だ。

にやにやしなから俺の顔を見る利一。

「改めて聞くが、何処で食うんだ？」

俺は、このまま行くと、話しの主導権を利一に取られると思い。無理に話しの流れを変えた。

「せっかく高校生になったんだから、決まってるじゃんか。天気も良いし、屋上で昼飯って、俺、やってみたかったんだよなー」

目を輝かせて、言う利一。

「おいおい、屋上っていったら、不良のたまり場ってイメージしかないんだが」

なんかんだ言いながらも、階段を上る。

「大丈夫だつて、今、平成何年だと思ってるんだよ、そんな絶滅危惧種居る訳が——」

そして、屋上の鉄の扉を開けると、気持の良い風が、髪をなびかせたと思ったら、目の前に在った光景は、煙草を啜えた、不良4人が立っていた。

絶滅危惧種居た——！！

第4話 屋上

そして、屋上のドア開けると、気持の良い風が、髪をなびかせたと思ったら、目の前に在った光景は、煙草を啜えた、不良4人。

絶滅危惧種居たー！！

「あん！」

俺、一般高校生と、一般変態性を睨む、不良。

俺達は、不良達に聞こえ無いよう、囁くようにして、

「おい、利一、あんだって、『あん』」

「『あん』って何だよ、俺の知っている『あん』って、あんこの『餡』と、こないだ見た、保健のDVDで観た、女の人の喘ぎ声の『あん』しか、知らねえよ」

「アレじゃねえか、外国語じゃね？ どっかの国の挨拶的な」

「あんな、怖い顔で睨む挨拶する、国が在ったら、もうその国終わってるよ、北〇鮮も真っ青だよ」

そんな、話を男達に聞き取れないくらいの声で話している時、俺は、二つ間違っている事に気付いた。そこに居るのは6人だと。不良らしき一人が、何故か分からないが、うつ伏せに倒れていて動かない。もう一人は、不良4人に囲まれている、女子生徒がいることにだ。

男4人が黒く分厚い本持った、女子生徒を囲んでいた、そして、ソイツは、朝、俺達に毒舌を吐いた女子であり、俺のクラスメイトだ。一時間目のホームルームでの自己紹介をした時にアイツだけは、覚えた。記憶力は、悪いほうだが、迫力のある苗字と、自分の名前と一文字被っていて何より、初対面で毒舌を吐かれたのだから、意識をしなくても、頭に残ってしまっていた。

「鬼塚 千尋……」

そう俺の口から、自然にこぼれた。

「ちよつと、貴方達、臭いから、消えてくれないかしら」

男4人に囲まれた状況で鬼塚は、全く怯むことなく。男達に言葉を浴びせる

「あん、何だ、このアマ！」

また『あん』だ。

「ああ、そう、貴方達の、そのちつばけな脳じゃ、今の言葉を理解出来なかったのね。御免なさい、じゃあ、訂正するわ、そのフェンスから、飛んでくれないかしら？」

おい！ 煽ってどうするつもりだ？ 『勝ち目何かないだろう』普通なら、そう思うところだろうが、俺は、男達よりも、鬼塚の方が、怖く感じた。

「おい、どうする？」

利一が俺の耳元で囁く。

「どうするって、どうにかして助けるに――」

ドガ！

一瞬、鬼塚から目を離れた時、何か、鈍い音がしたと思って、鬼塚を含めた男達の方を見ると、鬼塚の前に居た男が、のけ反るような格好で空中に居た、足が屋上の床から離れている、いや、飛んでいる？ 鬼塚の右手は、縦方向に本を向けて、大きく上げていた。そこで、ようやく俺は理解した。鬼塚がこの分厚い本で男の顎を吹っ飛ばしたのだと。

「がッ」

ドガ

そして、男は、その場に仰向け倒れ込んだ。動かない。痛いなどの声が出るのかと思いきや、ぴくりとも動かない、どうやら、気を失ったらしい。他の3人も倒れた男を見て動かない、動揺しているのが表情から読みとれる。俺と利一も動かない。そして、次に動いたのが、鬼塚だった。

女とは、思えない身のこなしで、男達の元へ飛び込んでいき、本で蹴散らして行く。

そして、1分後その場に立っていたのは、鬼塚一人だった。圧倒的。まるで、大人と子供の喧嘩のようだった。

第5話 就寝

そして、男4人が倒れている場を悠々歩き、出入口つまり、俺達の方へと歩いて来る。

「全く、人がせつかく、静かに昼食を取ろうとしてたのに、飛んだ邪魔が入ったわ」

俺と、利一の間を通る、鬼塚に俺は、

「おい、コレどうするんだよ、ちよつとやり過ぎなんじゃないのか？」

その言葉を聞き、足を止める。

「これから、教員に言つて、来るわ。まあ、最低でも、停学、悪ければ退学かもしれないわね」

自分を自嘲するかのように、少し笑う鬼塚。

「別に後悔は、してないわ——あと、やり過ぎ？ 知った風な口を聞かないでくれないしら、そいつらは、私の夢を汚したのよ」

そう言つて、鬼塚は、階段を降りて行つた。

「ふう〜おかねえ〜」

緊張の糸がれたらしく、利一が言葉を漏らす。

「それより、飯は、どうすんだよ。こんな惨劇の現場で俺は食いたくねーぞ」

利一は、何も見ずに。

「昼休みは、あと、22分37秒あるけど」

「仕方ねえな、教室に戻つて食うか」

「えー」

遠足が中止になった、小学生みたいな顔をする利一。

「やめろ、気色悪い。だまって、教室で食つてろ」

そう言つて、俺達も階段を降り始める。その時、俺は、朝のメールの事を思い出した。

「そうだ、利一、このメールを送ったの、お前じゃないよな？」

俺は、携帯を取り出し、画面を開き、利一に見せた。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日目ミッション。『踏ませるな、助ける』

「ん、何だコレ？ 訳分かんないな」

「宛先不明なんだよ、俺はお前の悪戯じゃないかと思っているんだか」

「俺じゃ無いよ、俺だったら、千秋に送るんなら、もっと可愛くデコレーションしてやるぜ」

親指を立て、自信ありげに言う利一。マジ気持ち悪い。どうやらコイツでは無いらしい。

「ああ、食欲無くなつて来た」

「えっ、何で？」

俺は、利一の胸ぐらを掴んで、

「お前のせいだよ」

ドガ！

利一の額に頭突きを食らわして、一足早く、階段を降りる。

「じゃあな、黙って、一人で飯食つてろよ、お前は、喋んなきゃ普通なんだからよ」

「痛てて、分かって無いな千秋、俺が変なのは、お前の前だけだよ」

「お前今日、家に帰っても、家があると思つなよ」

「それどういう意味!？」

それから、何だかんだで、利一は、何故か俺の教室で飯を食って、何も特に変わった事も無く、学校も終わりに家に帰った。

時刻は、23時40分。あと20分足らずで、4月6日も終わる俺は、眠たくなり、いつもよりも少し早いが就寝することにした。春休みボケがまだ抜けて無い事もあるし、馬鹿の相手をして疲れた事もある。高校が始まって間もないと言うのに、色々な事があつたな。

俺は、ベッドの布団の中に潜り込むと、あつという間に、意識が無くなった。

ブーン、ブーン、ブーンブーン!

俺の枕元で、これでもかと、自己主張をする。人類の英知の結晶「あーうるさいな」誰だ! こんな朝っぱらから、メールなどしてくる奴は」

部屋のカーテンの隙間からは、暖かそうな日の光が指しこんでいる。残念ながら、もう朝のようだ。

俺が寝ころんだまま、布団から手を伸ばし枕元にある携帯を開けてみると、6時58分をデジタル表示がとも分かりやすく教えてくれた。いつも起きるのは7時ジャスト。どうやら、もう2度寝を

している暇は、無いみたいだ。

携帯には、新着メール1件。宛先不明。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日目ミッション。『踏ませるな、助ける』

「また？ 誰だよホントに——」

ジリジリジリジリ！

「うるせー！」

バン！

俺は一つの違和感、異変を感じた。そして携帯の日にちを見た時、それは確信に変わった。

4月6日？ おいおい、携帯がぶっ壊れたのか？ 今日4月7
の筈だろ……

第6話 4月6日

4月6日水曜日？ おいおい、携帯がぶっ壊れたのか？ 今日
4月7日木曜日の筈だろ……

俺は、2階の自分の部屋から、1階のリビングにかけ降り、テレビを見た。

「お兄ちゃん、どうしたの？」

妹が朝食を取っていたが、そんな事は、関係無い。俺はテレビのリモコンを回す。

ピ、ピッ、ピッピッ

「ちよっと、お兄ちゃん、私がテレビを観てたのに」

そんなことを妹が言っているが、今はお構いなしだ。そして、天気予報をやっている番組で俺の指は、止まる。

「今日、4月6日の予報は、関東地方を中心に快晴——」

なっ！？ 今日4月6日！？ おいおい、アナウンサーの間違

いか？ それともこれは、録画が何か！？

俺は、台所へ行き、朝食の支度をしている母さんに——

「母さん！」

「どうしたの、そんなに慌てて？」

「まだ時間は、あるでしょ、まあ、昨日、入学したばかりで、落ち着かないのは分かるけど」

昨日？ —昨日の筈だろ——昨日はもう普通に学校へ行って、利一を殴ったりして、鬼塚が、不良をやつけるところを見たりした筈だ。

「昨日が、入学式！？ —昨日じゃ無くて！？」

「なに寝ぼけているの、昨日は、私と一緒に、入学式へ行つたじゃない」

アレが夢？　アレが夢ならハイビジョンブルーレイも真つ青な高画質だぞ。

それから、今日だされた朝食も昨日と全く同じモノだ、テレビでやっているニュースも昨日観たモノと一緒にだ。

その後俺は、まだ事態を把握していないが、親も居るし、家に居ても進展が無いと思い、学校へと向かった。

自転車を漕ぎながら、情報を整理して、俺は、一つの結論を出した。

アレは、夢だったのか？――はは、そうだな、夢だ夢。シークムント・フロイトさんも、確かこんな語録を残していたし「夢は現実の投影であり、現実が夢の投影である。」で在るって言うてたし、まあ意味分かんねえけど。頭ではこの異常事態を解っているが、俺は現実逃避をして、自転車を漕ぐ。気分の問題なのか、体調が悪いのか分からないが、足は重く感じた。

第7話 人間時報

そして、学校へ着いた俺は、自転車小屋に自転車を置いていた。確か夢だと、ここで、校門の方から利一が馬鹿みたいに――

「よっおおー！愛ちゃん」

そう言いながら、俺の方へ自転車を走らせる、利一。

んな、馬鹿な！ あれは、夢だった筈だろう、なんでここまで一緒なんだ！？ デジャブとか既視感なんて、レベルじゃあねーぞ！ 今日という時間が経つたびに、夢のいう逃避を壊されている気がした。

俺は自転車を漕いできた利一をスルーした、利一は、不思議そうな顔をしている。そりゃそうだ、いつもの俺なら何らかの、アクションを起こしていた筈だ、現に、あの時は、リアットを食らわしてやった。

自転車を置いた、利一が、俺の元へ歩いて来た。

「どうしたんだ千秋？ いつもと違うぞ、体調でも悪いのか？」

俺は、ふと思った、コイツなら――

「利一、今は何時だ！^{いつ}」

利一は、何も見ずに、

「8時24分も26秒を回ったとこだけど」

「違う、何年、何日、何時、何分、何秒で聞いているんだ！

「なんだよソレ、どうかしたのか？」

「いいから、答えてくれ」

「ああ」

少し戸惑いながらも返事をする利一。

もし、世界中の時計が狂ったとしても、コイツだけは狂わない筈だ。それくらいに、俺は時間に対して、利一に信頼している。

俺は、携帯の電波時計の表示に見ながら、利一の言葉と、照らし合わせる。

「今日は、201×年、4月——」

もし、利一が全部合っていたのなら、俺の記憶を夢だと信じられる。利一が4月7日だと言えば俺は、俺は世界中の時計よりも、利一を信じる。あいつが時間を間違える筈は無い。何故なら利一は、人間時報。完璧な体内時計を持つ人間だ。俺は、中学から利一を見てきて、今まで間違った事など一度も無かった。

「——6日——8時24分も52秒を回ったとこだけど？」

俺は、甘く見ていた、利一は、完璧な体内時計を持つ人間。7日か6日で俺は、この事を判断するつもりだった——だが結果は、ありえない方向へと向かった。

利一が8時24分も52秒と言った時、俺の携帯の電波が示していた、時間は、8時25分54秒。1分2秒も誤差がある。

「利一、携帯を貸してくれ」

「えっ何だよ？」

さつきから利一は、ずっと困惑気味だ、状況が読み込めて無いらだ。

「お前の時計と、俺の時計を見比べたい」

利一から、携帯を借り、自分の携帯と時刻を見比べる。もしかしたら、やはり俺の携帯がイカれているんじゃないかと思ったからだ。携帯は、同じ時刻を指していた。

「利一、お前か携帯、どっちかの時計が狂っているぞ」

「はあ？ そんな馬鹿な——」

利一に携帯を返す。

「！？ アレ」

利一も驚きを隠せないみたいだった。

「どっちが、正しいか、分かるか利一」

目を瞑り、集中する利一。

「俺だ……俺が間違っていた」

まさかと思ったが、利一が間違っていた——頭が痛い、重い。

「利一……俺、ちょっと頭痛いから、保健室へ行くわ」

「おい、大丈夫か。顔色メツチャ悪いぞ」

気遣うように、言う利一。

「ああ、大丈夫だから、早く教室へ行ってくれ——」

「一緒に寝てやろうか？」

さっきと同じように、気遣うように、気持ち悪い言葉を口にする利一。

「俺と法廷で戦いたいのか！」

安心した顔で利一は、

「うん、そうじゃないとな、千秋は」

「じゃあな、教室に行くから、ゆっくり休めよ」

そう言っ、利一は、教室へ向かって行った。安心したのは、俺もだ。取りあえず、利一は、利一だった。

第8話 保健室で考察

俺は今保健室で、ベッドに寝ている。頭が痛いと言ったらすぐにベッドを貸してくれた。今、保健の先生は、出かけて居なくなり、保健室は、俺一人だ。静かな保健室に架け時計の秒針の針の音が、カチカチと鳴り響く。

俺は、ベッドに横たわり、頭の中で、最初の4月6日と、今の4月6日について、整理をする事にした。

まず、俺は自分の頬に右手を持って行き、一応確かめた。

「痛い」

軽く、涙が出そうになった、色々な意味で。

この異変に気付いているのは、どうやら、俺一人みたいだ。妹も母さんも、普段と変わらなかつたし、完璧な体内時計を持つ利一でさえ、この異変に気づいていない。恐らく気づいているのは俺一人だろう。何故俺だけが気づいているのか、これも謎だ。

そして最初、つまり、1回目の4月6日に何かが在ったと考えるのが妥当か。やはり1番怪しいのは、このメール。

俺は、携帯を開き、メールボックスを見る。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日目ミッシヨン。『踏ませるな、助ける』

怪し過ぎる。宛先が不明なところが特にだ。がんばれよ、1日目ミッシヨン。『踏ませるな、助ける』これが何を意味するのかだ、1日目ってのは、学校が始まって1日目って事か？ ミッシヨン、つまり、する事？ 踏ませるなど、助ける。どちらも主語が無くて、全く分からない。

そして、おかしな点は、今日、つまり2回目に利一が、時刻を外した事だ、いや、もしかしたら、1回目の時もすでに、外していた

可能性もあるが、もう確かめる術は無い。

幾つかの可能性が生まれた。自分がおかしいのか、世界がおかしいのか。

もし、利一が、時刻を外さなければ、俺は、自分がおかしいと結果を出していたかもしれないが、このタイミングで、利一が時刻を外すのは、偶然では、無いと思う。

つまり、おかしいのは、この世界。そして、今の状況から、考えられる事は、今、俺、もしくは、世界が。『今日という、4月6日を2回繰り返ししている』、簡単に言くと『ループ』している、これが、俺が考えている中で、一番辻褄が合う。

この最初の記憶は、1回目の4月6日。そして、今が『2回目』という事か。なんともまあ、SFな答えが、出て来たモンだ。自分で出した答えに、俺は少し笑ってしまった。だってそうだろう、今まで、平凡に人生を謳歌してきた、奴がいきなり、こんな、サイエンス・フィクション、まるで、漫画や、アニメ、映画、ゲームのような、絵空事に巻き込まれてしまうなんて——神様でも、仏様でも良いが、配役のミスじゃないか？俺は、その辺に居るモブキャラだと思っていたが、こんな、主人公クラスの出来事、俺には、荷が重すぎる。代ってくれる奴が居るのなら、この役を代ってもらいたい。

我ながら、余りにも情けない愚痴をこぼしたが、助けてくれそうな奴は居ない。こんな事を話しても、信じる奴など居ないだろうし、下手したら、精神病棟へ入れられてしまう可能性もある。全くどうしたモノかな。

待てよ、このまま、何もせずに、明日を迎えようとしたらどうなるんだ？また、4月7日には、ならずに、また、4月6日を繰り返しするのか？ 分からないな——

ガラ！

「頭は、どうだー！！ 愛ちゃん！」

ドアを開け、けたたましく、現れたのは、言うまでも無いか。

第9話 チョココロネ

「頭は、どうだー！！ 愛ちゃん！」

保健室のドアを開け、けたたましく現れたのは、言うまでも無いか。

「お前のせいで、また痛くなってきたよ」

俺は、立ちあがり、そばに在った台の上から、消毒液の容器を持つて利一の元へ行き、口に容器を突っ込んでやった。

「お前、いつも、大きな声を出して、喉が大変そうだから、消毒してやろうか？」

「ふいません、ふいません」

そして、俺は、容器を口から離して、

「で、何の用だ」

「ゴホゴホ！ なんの用じゃないよ、せっかく、昼休みで寂しいだろうと思って、一緒に食べる為に、弁当を持ってきたのに、ほらあ、千秋の好きな、チョココロネもさっき購買で買って来たぞ」

そう言いながら、笑顔で、弁当箱の入った袋と、チョココロネを見せる、利一。さっきまでの、SF的空氣が、コイツが来ただけで一気に崩れた。少し古いが、KY（空氣読めない）が在るが、コイツの場合はKK（空氣壊す）だな

「おいおい、ここで飯食っても良いのかよ」

「大丈夫だ、さっき先生に聞いて来た、軽くなら食べても良いってそう言いながら、近くの机に、弁当を広げる、利一。

「それって、軽くっていいのか？」

「人によって、軽いや重い、その他色々の価値観は、変わる。俺に

とってこれは、軽いから、問題ナッシング！」

親指立てをこちらに見せる。コイツを見ると、なんだか和むなゝああそうか、確か、動物が可愛く見えるのは、自分よりも馬鹿だからって、聞いた事あるな。そんな感じが。しかし、この馬鹿は、勉強が出来る。前言撤回だ、ああ、そう思うと、やっぱり腹立ってきた。

まあ、確かに、いつの間にか昼休みで、朝も、色々あってろくに食って来ないから、腹ペコだ、俺も、利一の前に座り、バックから、弁当を取り出した。

「いただきます」

飯を食べだして、すぐに利一が、

「千秋、さっき、職員室に行った時にさ」

ああ、此処で、飯を食って良いか、聞きに行った時か。

「屋上で、何か在ったらしくてさ、先生達が慌ててたんだよ、どうやら、話を聞いて察するに、屋上で喫煙をしていた男子5人が、女子に乱暴しようとしたら、逆にやられたとか、どうたら、こうたら」

その話を聞いてすぐに、俺は、分かった。

「その女子って、鬼塚って名前じゃないか？」

「えっと、女子かどうかは、分からないけど、確かに鬼塚って名前は、確か言ってたな」

どうやら、2回目の世界でも、鬼塚は、男子に絡まれて、勝ったみたいだ。

そして、俺は、飯が食べ終わり、5時間目は、普通に授業に出て、特別に何かする訳でも無く、学校が終わって、家へと帰った。

第10話 枕でため息

学校が終わって、重い足取りで家に帰った。

そして、今は、4月6日。23時33分。

俺は、自分の部屋のベッドで仰向けに横たわり、頭の中を整理している。

もし、これで、また4月6日に戻ったら、恐らく何らかのアクションを起こさないと、4月7日を迎える事はないだろう。もしこれで何もせずに、4月6日を迎えられたら、ただの夢だった事で、笑い話で済むんだけどな。

メールの内容の、『踏ませるな、助ける』きっとこれが何らかの鍵になっていると考えるべきか、まずは、何を『踏ませるな』って事を考える事か、『踏ませるな』コレは、俺に対して言っている言葉で、『何かを踏ませるな』って事か？俺自身に言っているのなら『踏むな』になっている筈だ。

一体何を踏ませないようにすればいいのか？1回目、2回目と、俺の周りで何かを踏んだ奴なんか、俺の知る限りは、居なかった。つまり、もっと視野を広げる必要があると言っ事か。

俺の行動によって、この4月6日は、大なり小なり確実に変化する。1回目と2回目では、大分内容が変わった。もし、今日、2回目を1回目と同じような行動をすれば、恐らく2回目目の内容は、1回目と酷似する筈だ。

このメールの『踏ませるな、助ける』は、本来なら、何かが、踏まれるモノを踏まれないようにしろ、助けられなかったモノを助ける、そういう意味か？それが、ループを解く鍵なのか？そうだ

と、考えると、まずは、これが何かを特定する必要があるな……はあゝ何で俺が、こんなに頭を使わんといかんのだ、俺は、頭がとっても、悪いんだぞ。あの高校が受かったのでも奇跡だったのに。あゝあそこで運を全部使い果たして来たのか？
ため息をつき俺は枕に顔を埋める。

顔を枕からお越して部屋の掛け時計に目をやると、時刻は、23時58分。

あと2分で今日も終わる。2分経ったら、どうなるか、これで、ようやく、内容が大体分かるだろう。もし、4月7日になれば、ただの笑い話だ。もし、また4月6日になれば、確実に世界、もしくは、俺がループしていると、確証が得られる——4月6日に戻ったのなら、俺は、ループを解かなければいけない。流石に、何日も同じ日を繰り返してられるか。

そして、それを解く鍵が、あの謎のメール。これは、ラッキーと思うべきなのか？ あのメールが無ければ、確実に暗礁に乗り上げてた筈だ。

そして、時計の針が、12を指すと同時に俺は、意識を失った。

俺の睡眠を邪魔したのは、『予想通り』目覚まし時計の、うるさいアラームでは無く、一つのメールの着信だった。

ブーン、ブーン、ブーンブーン！

俺の枕元で、これでもかと、自己主張をする。人類の英知の結晶携帯には、『新着メール1件。』宛先不明。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日目ミッション。『踏ませるな、助ける』

第11話 黒くて分厚い本（前書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第11話 黒くて分厚い本

俺の睡眠を邪魔したのは、『予想通り』目覚まし時計の、うるさいアラームでは無く、一つのメールの着信だった。

ブーン、ブーン、ブーンブーン！

俺の枕元で、これでもかと、自己主張をする。人類の英知の結晶。携帯には、『新着メール1件。』宛先不明。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日目ミッション。『踏ませるな、助ける』

時刻は、6時58分。携帯は、4月6日を指している。

俺がやらなきゃいけない事は、まず、『踏ませるな』をなんだか特定することだが——『助ける』——俺が変えなきゃいけない事は、1回目、2回目と同じことが起こっている事の筈だ、それを踏まえ、俺が『助ける』で、一番最初に連想したのが、不良に絡まれている鬼塚だ。まあ、不良から助ける必要も無いように見えるが、女子が男子に絡まれているんだ、それを助けるって事が、『助ける』が示している事の可能性は在る。そして、恐らく、助けるの前にやらなきゃいけない事が、『踏ませるな』。その何かを踏ませてしまったら、また、4月6日に逆戻りって事になるだろう。

ジリ——

目覚まし時計が鳴った瞬間、俺は、すぐに止める。

「今日も面倒な、4月6日になりそうだ」

俺はベッドから起き上がりカーテンの隙間から漏れる朝日を見て、呆れ気味に呟いた。

学校へ自転車で向かう俺は、今日、一つの可能性にかける事にした。1回目、2回目の出来事の中で、一番印象に残っているのは、

アイツ、『鬼塚 千尋』だ。そして、アイツは、不良に絡まれる。
『踏ませる、助ける』の『助ける』意味は、鬼塚の事を不良から助ける事だろうと言うのが今の俺の変考えだ。だけど『助ける』の前に、『踏ませるな』が在る。昼休みに、鬼塚が絡まれるところを助ける前に、何か、踏ませないようにしないとならない。

『踏ませるな、助ける』の助けるが、鬼塚の事なら、踏ませるな、も鬼塚に関係ある可能性もあるな。

俺が、今日。3回目の4月6日にする事は、鬼塚の観察。ばれたら、あの強烈な奴だから、何されるか、わかったもんじゃ無いな。メタギのスネ〇ク並みに気を付けなければ。

取りあえず今日、3回目は、馬鹿（利一）をスルーし。鬼塚を観察することにした。

ホームルームが始まる前の時間、鬼塚は、1回目と同じく、独りで本を読んでいる。黒くて、分厚い本だ。なんの本だろうか。もしかして、デスノ〇トじゃないだろうな。まあ、冗談は置いて。

それから、1、2、3、4時間目が過ぎ、昼休みの時間がやって来た。鬼塚は、授業が終わると、弁当の袋を持って、教室を出て行った。俺もすかさず後を追う。

予想通り鬼塚は、階段を上って行き屋上へと、入って行った。俺もそれを確認し、階段を上って、屋上へ入ろうとしたが、俺の前に4人組みの男子生徒が、屋上へと入って行く、この顔は覚えている不良達だ。俺は階段の隅へ行きその場をやり過ごした。屋上へ入って行った。俺は、屋上のドアを少し開け、中の様子を窺う。

グラウンドを向いて座って、お弁当を広げようとしている、鬼塚に向かつて、不良4人が、煙草をふかしながら歩いて行く。

「何してんだよ、テメー1年か？ 此処は、俺達のたまり場なんだよ、どっかへ消えろよ」

「うるさい、貴方達が、消えなさい、生ごみが」

「んだと、コラー変な本を置きやがって」

一人の男子が、座っている鬼塚の隣に置いてあった、黒い分厚い本を『踏んだ』。

鬼塚は、その男を、物凄い形相で睨んだと思ったら、踏んでいる、足を蹴り飛ばし、そして、倒れた男を踏みつけた。

そして、本を持ち、男達に囲まれる、鬼塚。この光景をは、俺は、前に見た事があった。そうだ、分かった、1回目は、この場面で俺と利一が来たんだ。

そして、その後は、1回目と同じように、鬼塚は、男達を蹴散らして行った。

そして、3回目。4月6日の23時58分。

自分の部屋で俺は、考える。いや、もう、やる事は決まった。

『踏ませるな、助ける』これは、きつと鬼塚の事だ、そして俺がやらなきゃいけない事は、本を踏ませないようにすることと、不良から、鬼塚を助ける事？ の筈だ。

今日、学校が終わってから、あった急遽在った職員会議を、俺は、廊下で盗み聞きしていた。このまま行くと、鬼塚は、停学処分になるらしい、だとしたら、それから助けるという意味の可能性もある――俺の意識は、ここで途絶えた。

俺は、携帯のメール受信のバイブ音により目が覚めた。モチロン、時刻は、4月6日6時58分。

携帯には、『新着メール1件。』宛先不明。

F r o m 不明

S u d がんばれよ。

1日目ミッション。『踏ませるな、助ける』

全て予想通り。いや、いつも通りだが、これも今日で終わしてやる。俺が、今日やる事は決まっている、鬼塚の本を踏ませないようにし、鬼塚と不良の喧嘩を止める事。

なんとなく、携帯で今日の星座占いを見た。景気づけた、4回目で初めてだったが。

運勢は、12位。新たな、出会いがあるかも。

「12位か、全くついて無い1日になりそうだ」

第12話 着信

「12位か、全く、ついて無い1日になりそうだ」

そして、4時間目、昼休み。

当然のように鬼塚は、教室を後にする。そして、俺は教室を出ようとすると、利一が、弁当を持って、俺の教室に入ってきた。計算通りだ。

「おつ、千秋、何処行くんだ？」

俺は、利一の肩に手を置き、

「利一。職員室へ行つて、先生達屋上へ呼んで来てくれ」

利一は、驚いた顔で、

「はあ、何でだよ？」

「さっき、小耳に挟んだんだ、屋上で今不良が煙草を吹かしているつて」

「千秋、相変わらずだな、お前は」

「やれやれといった感じで言う利一。」

「いいから、頼むぜ、親友」

そう言つて俺は屋上へと走る。利一もさっきの言葉が効いたのか、凄いスピード、廊下を走つて行った。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

最近、運動不足だな、脇腹が痛い。階段を走つて登るのが、こんなに辛いとは……まだ、踏んでくれるなよ『あん』の奴ら。踏んだら——どうなるか、また戻るのか……

そして、屋上のドアを静かに開けて、目に入ったのは、座ってい

る、鬼塚と、それを囲む5人の煙草を啜えた不良。良かった、まだ本は、踏まれていない。俺は、鬼塚方に向かつて走る

「うるさい、貴方達が、消えなさい、生ごみが」

ちくしょう、3回目と同じだ、この後、不良が、

「んだと、コラー！ 変な本を置きやがって」

足を上げ、本目がけ、足を振り下ろす男子。

「させえるかああ！！」

ふざけんじゃねえぞ。もう沢山だ、終わらしてやる、4月6日を。永遠に生きたいと思っている程、俺は、強欲じゃねえだよ。あと、数十センチ――

俺は男達の中へ潜り込み、本を間一髪、掴んで、鬼塚の手も握り、男達から距離を取った。

「ちよつと、貴方何、勝手にの人手を握って。ちよつと、どいてくれるかしら、あの単細胞な、馬鹿に、赤色でも見せようと思ってるんだから」

「あん！ 何だテメーは、ソイツの連れか？」

おいしい！ 煽るなよ。てか、アイツまた、アンだよ、ホント意味知りてー、ググレば出て来るのか。とつ、そんな事、考えている、暇は無い。

「まあ、取りあえず、礼は、言っとくわ、ありがとう。だから、その本を返してくれるかしら」

「ああ、分かった――」

俺は、小声で、

「ちよつと、待て！ 本を返しても、お前、あいつ等に手を出すなよ」

「なんで、貴方の言う事を聞かないといけないのかしら？ 疑問だわ」

イラついている様子で俺に言う、鬼塚。

「なんでって、お前が手出したら、あいつ等、病院送りになっちまうだろ」

不良達を指さして、大きく叫んでしまう俺。

「な!？」

俺の言葉に驚いている不良達。だがお前達は知らないかもしれないが、コイツは、それ位の戦闘力を持っている。お前ら、3回中、3回とも、ノックアウトだからな。

「だから、下手に、手を出してお前が停学とか、退学になったら、馬鹿らしいだろ？」

「そうね、確かに、その通りかも、知れないけど、アレは、どうするの？ 私達の意味に関係なく、向こうは、やる気満々みたいだけど」

確かに、不良達は、今にも、襲いかかってきそうな、勢いだ。

たくつ、利一は、一体何しているんだ、まだ、教員は、来ないのか？

「じゃあ、私は、何もしないから、貴方がなんとかしなさいね、ヒローさん」

まるで、からかうように、言い、俺から5メートル程離れる鬼塚。

「ほお、女を庇うなんて、いい度胸してるじゃないか」

じわじわ俺との間合いを詰める良人。どうする？ どうする？

俺にコイツらを相手に出来る戦闘力なんて、ないぞ！

逃げれば、ループ。逃げなきゃ、殺られる。

[illegible]

俺の聲が漏れていたのか、後ろから鬼塚が、

「早く、A○フィールド張りなさいよ、殺られるわよ」

出来るなら、すでにやってるわー！ 全開にしてるわー。

はは、こうなりや、玉砕覚悟だ。俺は、もうどうにでもなれ、思った其の時。携帯のメールが来てバイブが鳴り、ポケットから右足へ振動が伝わった。

第13話 添付ファイル

はは、こうなりや、玉碎覚悟だ。俺は、もうどうにでもなれ、思った其の時。携帯のメールに来てバイブが鳴り、ポケットから右足へ振動が伝わった。

ちくしょう誰だ、こんな時に、俺が携帯に目をやるとソレは宛先不明だった。

！？ 俺はすぐにメールを開いた。その中には、

From 不明

Sud 『格闘技』

使用限界10分。ファイルを開き耳に付ける。

なんだ！？ このメールは、だが今はそんな事を考えている場合じゃない。あの宛先不明のメールだ、これはきっとこの状況の打開の策だと信じ、おれは言われた通りにメールに添付されたファイルを開き携帯を右耳へ当てた。

「何だ？ 助けでも呼ぶのかあ？」

右耳に携帯を当てると、機械的な女性の音声のようなモノが何かを言っている。

「ダウンロードファイル格闘技。使用限界10分」

そんな音声が聞こえると、俺の頭の中に何かが流れるような感覚が広がる。映像と言葉。つまり情報が一気に頭に流れて来るのが分かる。もしかしたら死ぬ前に見るといふ走馬灯は、こんなモノなのかもしれない。

—— 少しの間思考が停止した気がした。

「死ね、オラああッ」

一人の不良が俺の左頬に向けて、右拳を繰り出す。俺が反応出来る筈の無い速度で——

「はぁッ」

意識が戻った……違う、今までと違う自分になった。

ドガ！

「ぐオッ」

俺に向かって来た、不良は俺の左横で倒れて蹲っている。動かない、どうやら気絶しているみたいだ。

何が起こったか、俺が把握するのに数秒かった。そして、分かったんだ。『俺がやったんだと』俺は、無意識にいや、きつと自然に、まるで熟練された格闘技のスペシャリストが、咄嗟に襲われた時、自らの技を使用し相手を蹴散してしまうような、そんな自然な事が、不自然にも、俺に起こったんだ。

俺は、不良が放った拳を見極め、その手首を、右手で掴み、柔道――いや違う、俺の知っているのだと、柔術の技のように、捻り上げ、相手の体制が崩れたところへ、右足をかけ地面に叩きつけたのだ。それを見て驚いて動きが止まっていた残り3人不良達が、一気にかかって来た。

俺は、3人が自分に到着する前に、自分から飛び出して、自分から見て一番右に居る不良へ飛び込んだ。

「！？」

右拳をしたから斜めへと不良の顎へと放つ。体の回転するのが分かる、的確なタイミングでステップを踏みこんだのが分かる。きつと自分がこの姿を第三者の視点で見ていたのならきつと、プロボクサーかと思う程の美しいホームだと思うだろう。

俺の右手は的確に不良の顎にヒットする。だが余り感触は無い。スツと抜けたような感触が手に残る。

殴られた男は、その場に崩れるように、膝を着き、そして床にうつ伏せに倒れ込んだ。倒れる時には、もう意識が無かったのか、手を着いたりもせずにまるで、糸の切れた操り人形のように。

残り二人は、それでも俺に向かって来て、一人が俺の左脇腹に向かって蹴りを繰り出す。避けれるスピードだったが、俺はその足を

両手で受け止め、ソイツを持ち上げまるで、日本刀の抜刀術のように左から右へ振り、残り一人に向かってぶっ飛ばし、手を離す。二人は四メートル程吹き飛び、倒れ、そのまま沈黙した。

そして、静かになった屋上を見渡す。立っているのは俺と鬼塚だけだ。

自分で倒した、四人を見て体が震える。

なんだコレは！？ 何なんだ！？ こんな力、俺は知らない——ふっと俺は、鬼塚の方を見る。自分はどんな表情をしているのかさえ分からない程、動揺している。鬼塚の顔を啞然と驚愕が足したような顔だった。

鬼塚の顔を向いてすぐに、俺の頭にまるで電気が走ったかのような痛みが走る。ただの頭痛とは違う。脳みその中から、針で刺されているかのような痛み。

俺は痛みに耐えかね頭を抱える。そして、膝をついてその場に倒れた。意識が途切れる少しの間、誰かの声が聞こえたような気がした——

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4985z/>

高校生の時間外廊道（じかんがいろうどう）

2011年12月21日12時46分発行